

# Regularized Siegel-Weil formula について

市野 篤史 (ICHINO, Atsushi) \*

Siegel-Weil formula とは Eisenstein 級数と theta 積分の間の等式で, これは Eisenstein 級数が絶対収束するという仮定のもとで Weil によって示された [W]. この等式を Eisenstein 級数の絶対収束域の外へ拡張したもののひとつが, Kudla と Rallis による regularized Siegel-Weil formula である [KR2]. 彼等は Eisenstein 級数の留数がある種の theta 関数の積分と定数倍を除いて一致することを示したわけだが, 両者の比までは決定することができなかった. しかし Eisenstein 級数や  $L$  関数の特殊値の研究のためには, この比を決定することが不可欠である. これは池田により二次形式に関するある種の仮定のもとで決定され [Ik2], 今回はその仮定も外すことができたので報告したい.

## 1 主定理

最初に主定理を正確に述べるために, いくつか記号を導入する.  $k$  を数体とし, そのアデール環を  $\mathbb{A}$  とする.  $(Q, U)$  を  $k$  上の  $m$  次元二次形式の空間とする. つまり  $Q = {}^tQ \in \text{GL}_m(k)$  で,  $U = k^m$  は縦ベクトルの空間とする.  $H = O_Q$  を  $Q$  の直交群,  $G = \text{Sp}_n$  をシンプレクティック群とすると,  $G$  と  $H$  は reductive dual pair をなす. よって自明でない character  $\psi: \mathbb{A}/k \rightarrow \mathbb{C}^\times$  を固定すると,  $\widehat{G(\mathbb{A})} \times H(\mathbb{A})$  の Weil 表現  $\omega_Q$  が Schwartz 空間  $\mathcal{S}(U^n(\mathbb{A}))$  上に実現される.  $\Phi \in \mathcal{S}(U^n(\mathbb{A}))$  に対して, theta 関数を

$$\Theta(g, h; \Phi) = \sum_{u \in U^n(k)} \omega_Q(g, h)\Phi(u), \quad g \in \widehat{G(\mathbb{A})}, h \in H(\mathbb{A})$$

によって定義し, さらにその積分

$$I_Q(g, \Phi) = \int_{H(k) \backslash H(\mathbb{A})} \Theta(g, h; \Phi) dh$$

\*京都大学大学院理学研究科 (博士1年) 〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町  
E-mail address : ichino@kusm.kyoto-u.ac.jp

を考える. この積分が任意の  $\Phi$  に対して絶対収束する条件は, Weil によって知られている [W]. すなわち,

$$\mathcal{S}(U^n(\mathbb{A}))_{\text{abc}} = \{\Phi \mid I_Q(g, \Phi) \text{ は任意の } g \text{ に対して絶対収束}\}$$

とおくと,

$$\mathcal{S}(U^n(\mathbb{A}))_{\text{abc}} = \mathcal{S}(U^n(\mathbb{A})) \iff \begin{cases} Q \text{ は anisotropic,} \\ \text{または } m - r > n + 1 \end{cases}$$

となる. 但し  $r$  は  $Q$  の Witt index とする.

$P$  を  $G$  の Siegel 放物型部分群,  $\tilde{K}_G$  を  $\widetilde{G(\mathbb{A})}$  の標準的な極大コンパクト部分群とする.  $\mathcal{S}(U^n(\mathbb{A}))$  の  $\tilde{K}_G$ -finite な元のなす空間を  $\mathcal{S}_0(U^n(\mathbb{A}))$  で表す.  $\Phi \in \mathcal{S}_0(U^n(\mathbb{A}))$  に対し, 退化主系列表現の正則切断を

$$f_\Phi^{(s)}(g) = |a(g)|^{s-s_0} \omega_Q(g) \Phi(0)$$

で定める. 但し  $s_0 = (m - n - 1)/2$  で,  $g \in \widetilde{G(\mathbb{A})}$  を

$$g = pk, \quad p = \left( \begin{pmatrix} a & * \\ 0 & {}_t a^{-1} \end{pmatrix}, \zeta \right) \in \widetilde{P(\mathbb{A})}, \quad k \in \tilde{K}_G$$

と岩澤分解したときに

$$|a(g)| = |\det a|$$

とする. この時, Eisenstein 級数

$$E(g, f_\Phi^{(s)}) = \sum_{\gamma \in P(k) \backslash G(k)} f_\Phi^{(s)}(\gamma g), \quad g \in \widetilde{G(\mathbb{A})}$$

は  $\text{Re}(s) > (n+1)/2$  のとき絶対収束し, 全平面に有理型解析接続される. 我々は この Eisenstein 級数の  $s = s_0$  での挙動に興味がある.

さて  $0 < s_0 \leq (n+1)/2$  (つまり  $n+1 < m \leq 2n+2$ ) と仮定する. この時  $E(g, f_\Phi^{(s)})$  は  $s = s_0$  で高々 simple pole を持つことが知られている. さらに  $m-r \leq n+1$  と仮定し  $m' = 2n+2-m$  とおくと,  $m'$  次元二次形式  $(Q', U')$  で  $Q$  と同じ Witt 類に属するものが存在する. この  $Q'$  を  $Q$  の complementary と呼ぶ. ここで  $Q'$  が isotropic (つまり  $m-r < n+1$ ) ならば,  $\mathcal{S}(U^m(\mathbb{A}))_{\text{abc}} \subsetneq \mathcal{S}(U^m(\mathbb{A}))$  となる. 一方  $\mathcal{S}(U^m(\mathbb{A}))_{\text{abc}} \neq 0$  であることも容易に分かる. この時 theta 積分  $I_{Q'}(g, \Phi')$  を  $\mathcal{S}(U^m(\mathbb{A}))_{\text{abc}}$  上

の  $H'(\mathbb{A})$  不変な写像とみなし, この写像を  $\mathcal{S}(U^m(\mathbb{A}))$  全体に  $H'(\mathbb{A})$  不変に一意的に拡張することができる. この拡張を実現するのが, Kudla と Rallis による regularized theta 積分

$$I_{\text{REG}, Q'}(g, \Phi') = c_\alpha^{-1} I_{Q'}(g, \omega_{Q'}(\alpha)\Phi')$$

である [KR2]. ここで  $\alpha$  はある種の Hecke 作用素でゼロでない “固有値”  $c_\alpha$  を持ち,  $\omega_{Q'}(\alpha)\Phi' \in \mathcal{S}(U^m(\mathbb{A}))_{\text{abc}}$  となるものである. ([KR2] では Hecke 作用素ではなく微分作用素を用いているため,  $k$  は実素点を持つと仮定する必要がある.) この時, 主定理は以下のように述べられる.

**Theorem.**  $n+1 < m \leq 2n+2$ ,  $m-r \leq n+1$  と仮定する. この時  $\Phi \in \mathcal{S}_0(U^n(\mathbb{A}))$  に対し,

$$\text{Res}_{s=s_0} E(g, f_\Phi^{(s)}) = c_K I_{\text{REG}, Q'}(g, \pi_Q^{Q'} \pi_K \Phi)$$

が成り立つ. 但し

$$\begin{aligned} \pi_Q^{Q'} : \mathcal{S}(U^n(\mathbb{A})) &\longrightarrow \mathcal{S}(U^m(\mathbb{A})) \\ \pi_K : \mathcal{S}(U^n(\mathbb{A})) &\longrightarrow \mathcal{S}(U^n(\mathbb{A})) \end{aligned}$$

は  $\widetilde{G(\mathbb{A})}$  準同型で次のように定義される:

$$\begin{aligned} \pi_Q^{Q'} \Phi(u') &= \int_{M_{r_0, n}(\mathbb{A})} \Phi \begin{pmatrix} x \\ u' \\ 0 \end{pmatrix} dx, \\ \pi_K \Phi(u) &= \int_K \Phi(ku) dk. \end{aligned}$$

但し座標は

$$Q = \begin{pmatrix} & & 1_{r_0} \\ & Q' & \\ 1_{r_0} & & \end{pmatrix}, \quad r_0 = m - n - 1$$

ととり,  $K$  は  $H(\mathbb{A})$  のよい極大コンパクト部分群である. また  $c_K$  は Haar 測度の正規化から定まる定数で, 池田 [Ik2] によって具体的に計算されており, ある種の  $L$  関数の特殊値等によって表せる.

*Remark.*  $k$  が総実,  $m$  が偶数ならば, この定理は Kudla と Rallis による regularized Siegel-Weil formula [KR2] の精密化になっている. また  $Q'$  が anisotropic のときは既に池田 [Ik2] によって示されている.

## 2 Fourier-Jacobi 係数

主定理を証明するために, 両辺の Fourier-Jacobi 係数を比較することを考える. 実際  $Q'$  が anisotropic のときは, このような方針で主定理は示されている [Ik2].

最初に Fourier-Jacobi 係数の理論を復習する [Ik1].  $G = \mathrm{Sp}_n$  の部分群を次のように定める:

$$V = \left\{ v(x, y, z) = \left( \begin{array}{cc|cc} 1 & x & z & y \\ & 1_{n-1} & {}^t y & \\ \hline & & 1 & \\ & & -{}^t x & 1_{n-1} \end{array} \right) \middle| x, y \in k^{n-1}, z \in k \right\},$$

$$Z = \{v(0, 0, z) \in V \mid z \in k\},$$

$$L = \{v(x, 0, 0) \in V \mid x \in k^{n-1}\},$$

$$G_1 = \left\{ \left( \begin{array}{c|c} 1 & \\ \hline a & b \\ \hline c & d \end{array} \right) \middle| \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in \mathrm{Sp}_{n-1} \right\}.$$

この時  $V$  は Heisenberg 群でその中心は  $Z$  である. 各  $S \in k^\times$  に対し,  $V(\mathbb{A})$  の Schrödinger 表現  $\omega_S$  で central character が  $z \mapsto \psi(zS/2)$  となるものが, Schwartz 空間  $\mathcal{S}(L(\mathbb{A}))$  上に実現される. 具体的には,  $\phi \in \mathcal{S}(L(\mathbb{A}))$  に対し

$$\omega_S(v(x, y, z))\phi(t) = \phi(t+x)\psi((z+2t^t y+x^t y)S/2)$$

と表せる. さらに  $\widetilde{G_1(\mathbb{A})}$  は  $V(\mathbb{A})$  に共役で作用しているので,  $\omega_S$  を自然に  $V(\mathbb{A}) \rtimes \widetilde{G_1(\mathbb{A})}$  の  $\mathcal{S}(L(\mathbb{A}))$  上の Weil 表現に拡張できる.  $\widetilde{K_{G_1}}$  を  $\widetilde{G_1(\mathbb{A})}$  の標準的な極大コンパクト部分群とし,  $\mathcal{S}(L(\mathbb{A}))$  の  $\widetilde{K_{G_1}}$ -finite な元のなす空間を  $\mathcal{S}_0(L(\mathbb{A}))$  とおく.  $\phi \in \mathcal{S}(L(\mathbb{A}))$  に対し, theta 関数を

$$\vartheta_S^\phi(vg_1) = \sum_{t \in L(k)} \omega_S(vg_1)\phi(t), \quad v \in V(\mathbb{A}), g_1 \in \widetilde{G_1(\mathbb{A})}$$

によって定義する.

$A$  を  $G(\mathbb{A})$  上の保型形式とする.  $S \in k^\times$  と  $\phi \in \mathcal{S}_0(L(\mathbb{A}))$  に対し,  $\widetilde{G_1(\mathbb{A})}$  上の保型形式を

$$\mathrm{FJ}_S^\phi(g_1; A) = \int_{V(k) \backslash V(\mathbb{A})} A(vg_1) \overline{\vartheta_S^\phi(vg_1)} dv$$

で定める. これを  $A$  の Fourier-Jacobi 係数と呼ぶ.

まず Eisenstein 級数の留数の Fourier-Jacobi 係数だが, これは池田により計算されている.

$$Q = \begin{pmatrix} S & \\ & Q_1 \end{pmatrix}$$

と仮定してよく, 対応する直交分解を  $U = k \oplus U_1$  で表す. また  $\widetilde{G_1(\mathbb{A})}$  準同型

$$\begin{aligned} \mathcal{S}(U^n(\mathbb{A})) \otimes \mathcal{S}(L(\mathbb{A})) &\longrightarrow \mathcal{S}(U_1^{n-1}(\mathbb{A})) \\ \Phi \otimes \phi &\longmapsto \Psi(\Phi, \phi) \end{aligned}$$

を

$$\Psi(\Phi, \phi; u) = \int_{x \in L(\mathbb{A})} \Phi \begin{pmatrix} 1 & x \\ 0 & u \end{pmatrix} \overline{\phi(x)} dx$$

によって定義する.

**Proposition ([Ik2, Proposition 7.3]).** 簡単のため  $n \geq 3$  と仮定する. この時  $\phi \in \mathcal{S}_0(L(\mathbb{A}))$  と  $\Phi \in \mathcal{S}_0(U^n(\mathbb{A}))$  に対し,

$$\text{FJ}_S^\phi(g_1; \text{Res}_{s=s_0} E(f_\Phi^{(s)})) = \int_{H_1(\mathbb{A}) \backslash H(\mathbb{A})} \text{Res}_{s=s_0} E(g_1, f_{\Psi(\omega_Q(h)\Phi, \phi)}^{(s)}) dh$$

が成り立つ.

次に theta 積分の Fourier-Jacobi 係数を計算する.  $(Q, U)$  を  $m$  次元二次形式で  $m \leq n$  と仮定する.  $Q$  が anisotropic ならば, theta 積分の Fourier-Jacobi 係数は [Ik2, §6] で計算されている. 我々は isotropic な  $Q$  に対して regularized theta 積分の Fourier-Jacobi 係数

$$\begin{aligned} &\text{FJ}_S^\phi(g_1; I_{\text{REG}, Q}(\Phi)) \\ &= c_\alpha^{-1} \int_{V(k) \backslash V(\mathbb{A})} \int_{H(k) \backslash H(\mathbb{A})} \Theta(vg_1, h; \omega_Q(\alpha)\Phi) \overline{\vartheta_S^\phi(vg_1)} dh dv. \end{aligned}$$

を計算したい. [Ik2, Lemma 6.1] にあるように,

$$\begin{aligned} &\int_{V(k) \backslash V(\mathbb{A})} \Theta(vg_1, h; \omega_Q(\alpha)\Phi) \overline{\vartheta_S^\phi(vg_1)} dv \\ &= \sum_{\gamma \in H_1(k) \backslash H(k)} \sum_{u \in U_1^{n-1}(k)} \omega_{Q_1}(g_1) \Psi(\omega_Q(\gamma h) \omega_Q(\alpha)\Phi, \phi; u) \end{aligned}$$

となることはすぐに計算できる. 次にこれを  $H(k)\backslash H(\mathbb{A})$  上積分する. しかし, この積分は (条件収束はしているが) 項ごとには絶対収束しないという困難が生じる. つまり

$$\int_{H(k)\backslash H(\mathbb{A})} \sum_{H_1(k)\backslash H(k)} = \int_{H_1(k)\backslash H(\mathbb{A})} = \int_{H_1(\mathbb{A})\backslash H(\mathbb{A})} \int_{H_1(k)\backslash H_1(\mathbb{A})}$$

と式変形したいのだが,  $Q$  が anisotropic でない限りそれは正当化されない. よって  $Q$  が isotropic ならば, regularized theta 積分の Fourier-Jacobi 係数を計算しきることはできない. この困難を回避するためには, さらに Fourier 係数を調べる必要がある.  $\beta \in \text{Sym}_{n-1}(k)$  に対し,  $\text{FJ}_S^\phi(g_1; I_{\text{REG}, Q}(\Phi))$  の  $\beta$  番目の Fourier 係数  $\text{FJ}_{S, \beta}^\phi(g_1; I_{\text{REG}, Q}(\Phi))$  は,

$$c_\alpha^{-1} \int_{H(k)\backslash H(\mathbb{A})} \left[ \sum_{\gamma \in H_1(k)\backslash H(k)} \sum_{t_u Q_1 u = 2\beta} \omega_{Q_1}(g_1) \Psi(\omega_Q(\gamma h) \omega_Q(\alpha) \Phi, \phi; u) \right] dh$$

となる. すると, この積分は  $\text{rank } \beta \geq m-1$  ならば, 項ごとに絶対収束することが示せる. 従って上の式変形は正当化することができて,

$$\begin{aligned} & \text{FJ}_{S, \beta}^\phi(g_1; I_{\text{REG}, Q}(\Phi)) \\ &= c_\alpha^{-1} \int_{H_1(k)\backslash H(\mathbb{A})} \sum_{t_u Q_1 u = 2\beta} \omega_{Q_1}(g_1) \Psi(\omega_Q(h) \omega_Q(\alpha) \Phi, \phi; u) dh \\ &= \int_{H_1(\mathbb{A})\backslash H(\mathbb{A})} \int_{H_1(k)\backslash H_1(\mathbb{A})} \sum_{t_u Q_1 u = 2\beta} \omega_{Q_1}(g_1, h_1) \Psi(\omega_Q(h) \Phi, \phi; u) dh_1 dh \\ &= \int_{H_1(\mathbb{A})\backslash H(\mathbb{A})} I_{\text{REG}, Q_1, \beta}(g_1, \Psi(\omega_Q(h) \Phi, \phi)) dh \end{aligned}$$

と計算することができる. さらに [Ik2, Proposition 6.2] と同様に計算を進めると, 次を得る.

**Proposition.**  $(Q, U)$  を  $m$  次元二次形式として  $n+1 < m \leq 2n+2$ ,  $m-r < n+1$  と仮定する.  $(Q', U')$  を  $Q$  の complementary とする.  $Q'$  は isotropic だから,

$$Q' = \begin{pmatrix} S & \\ & Q'_1 \end{pmatrix}$$

としてよい.  $Q_1 = Q'_1 \oplus \mathcal{H}^{r_0}$  とおく. この時  $\beta \in \text{Sym}_{n-1}(k)$  で  $\text{rank } \beta \geq m' - 1$  となるものに対し,

$$\begin{aligned} & \text{FJ}_{S,\beta}^\phi(g_1; I_{\text{REG},Q'}(\pi_Q^{Q'} \pi_K \Phi)) \\ &= c_K^{-1} c_{K_1} \int_{H_1(\mathbb{A}) \backslash H(\mathbb{A})} I_{\text{REG},Q'_1,\beta}(g_1, \pi_{Q'_1}^{Q'_1} \pi_{K_1} \Psi(\omega_Q(h) \Phi, \phi)) dh \end{aligned}$$

が成り立つ.

さて  $\Phi \in \mathcal{S}_0(U^n(\mathbb{A}))$  に対して,

$$A(g) = A(g, \Phi) = \text{Res}_{s=s_0} E(g, f_\Phi^{(s)}) - c_K I_{\text{REG},Q'}(g, \pi_Q^{Q'} \pi_K \Phi)$$

とおき,  $A = 0$  を  $n$  に関する帰納法で示す.  $Q'$  が anisotropic のときは, 既にこれは池田によって示されている [Ik2]. また  $Q' \simeq \mathcal{H}$  ならば, 直接計算で示すことができる. (両辺とも Levi が  $\text{GL}_1 \times \text{Sp}_{n-1}$  となる  $\text{Sp}_n$  の放物型部分群からの Eisenstein 級数の特殊値になる.) よって  $Q'$  は isotropic,  $m' \geq 3$ ,  $n \geq 3$ , かつ  $n+1 < m \leq 2n-1$  と仮定してよい.  $S \in k^\times$  と  $\beta \in \text{Sym}_{n-1}(k)$  で  $\text{rank } \beta \geq m' - 1$  となるものに対して, 上の命題と帰納法の仮定により,

$$\text{FJ}_{S,\beta}^\phi(g_1; A) = 0$$

となることが分かる. さらに次の補題を示すことができる.

**Lemma.**  $S \in k^\times$ ,  $\beta \in \text{Sym}_{n-1}(k)$  とする.  $A$  を  $\widetilde{G(\mathbb{A})}$  上の保型形式とする. 任意の  $\phi \in \mathcal{S}_0(L(\mathbb{A}))$  と  $f \in \mathcal{H}(\widetilde{G(\mathbb{A})})$  に対し,  $\text{FJ}_{S,\beta}^\phi(g_1; \rho(f)A) = 0$  と仮定する. 但し  $\mathcal{H}(\widetilde{G(\mathbb{A})})$  は  $\widetilde{G(\mathbb{A})}$  の Hecke 環で,  $\rho$  は右移動を表す. この時

$$B = \begin{pmatrix} S/2 & \\ & \beta \end{pmatrix} \in \text{Sym}_n(k)$$

とすると,  $A$  の  $B$  番目の Fourier 係数  $A_B$  はゼロ.

ゆえに任意の  $B \in \text{Sym}_n(k)$  で  $\text{rank } B \geq m'$  となるものに対して,  $A_B = 0$  となることが分かる.

### 3 保型形式のランク

主定理を示すためには,  $A = A(\Phi)$  の大域的なランクと局所的なランクを比較する必要がある [H].  $\Phi^0 = \otimes_v \Phi_v^0 \in \mathcal{S}_0(U^n(\mathbb{A}))$  と  $k$  の有限素点  $v$  を固定し,  $\Phi^0$  の  $v$  成分だけを動かす. つまり  $\tilde{G}_v$  準同型

$$\begin{aligned} \mathcal{S}(U_v^n) &\longrightarrow \mathcal{A}(G) \\ \Phi_v &\longmapsto A(\Phi), \quad \Phi = \Phi_v \otimes \otimes_{v' \neq v} \Phi_{v'}^0 \end{aligned}$$

を考える. ここで  $\mathcal{A}(G)$  は  $\tilde{G}(\mathbb{A})$  上の保型形式のなす空間である. さて自然な  $\tilde{G}_v$  準同型

$$\begin{aligned} \mathcal{S}(U_v^n) &\longrightarrow \text{Ind}_{\tilde{P}_v}^{\tilde{G}_v} \chi_{Q_v} |\det|^{s_0} \\ \Phi_v &\longmapsto [g \mapsto \omega_{Q_v}(g) \Phi_v(0)] \end{aligned}$$

の像を  $R_n(U_v)$  とおく. 但し  $\chi_{Q_v} : \tilde{P}_v \rightarrow \mathbb{C}^1$  は  $Q_v$  から定まる character とする. 同様に  $R_n(U'_v) \subset \text{Ind}_{\tilde{P}_v}^{\tilde{G}_v} \chi_{Q_v} |\det|^{-s_0}$  も定義する.

まず Kudla, Rallis, Sweet による退化主系列表現の結果 [KR1, S] を用いると, Eisenstein 級数の留数  $\text{Res}_{s=s_0} E(f_\Phi^{(s)})$  は

$$\mathcal{S}(U_v^n) \longrightarrow R_n(U_v) \xrightarrow{M_v^*(s_0)} R_n(U'_v) \longrightarrow \mathcal{A}(G) \quad (1)$$

を経由することが示せる. 但し  $M_v^*(s_0)$  は正規化された絡作用素から誘導される写像である. 一方 Rallis による invariant distribution theorem [R] より, regularized theta 積分  $I_{\text{REG}, Q'}(\pi_Q^Q \pi_K \Phi)$  は

$$\mathcal{S}(U_v^n) \xrightarrow{\pi_{Q_v}^Q \pi_{K_v}} \mathcal{S}(U_v'^n) \longrightarrow R_n(U'_v) \longrightarrow \mathcal{A}(G) \quad (2)$$

を経由する. さらに (1) と (2) は定数倍を除いて一致することも示すことができる. ゆえに  $A(\Phi)$  は

$$\mathcal{S}(U_v^n) \longrightarrow R_n(U'_v) \longrightarrow \mathcal{A}(G)$$

を経由することが分かる. 一方  $R_n(U'_v)$  は  $\tilde{G}_v$  の既約表現で, そのランクは  $m'$  であることが知られている [KR1, S]. よって  $f \in \mathcal{S}(\text{Sym}_n(k_v))$  で, その Fourier 変換  $\hat{f}$  は

$$\{x \in \text{Sym}_n(k_v) \mid \text{rank } x \geq m'\}$$



に support を持ち,  $f$  は  $R_n(U'_v)$  にゼロで作用しないものが存在する. この時, 任意の  $B \in \text{Sym}_n(k)$  と  $g = ((g_v), \zeta) \in \widetilde{G(\mathbb{A})}$  で  $g_v = 1$  となるものに対し,

$$(\rho(f)A(\Phi))_B(g) = \hat{f}(B)A(\Phi)_B(g) = 0$$

となる. 実際  $\text{rank } B \geq m'$  ならば  $A(\Phi)_B = 0$  で,  $\text{rank } B < m'$  ならば  $\hat{f}(B) = 0$  となる. さらに  $G(k)$  は  $G_v$  で dense だから  $\rho(f)A(\Phi) = 0$  で,  $f$  は  $R_n(U'_v)$  にゼロで作用せず  $R_n(U'_v)$  は既約だから, 結局  $A(\Phi) = 0$  となり主定理を得る.

## 参考文献

- [H] R. Howe, *Automorphic forms of low rank*, Noncommutative harmonic analysis and Lie groups, Lecture Notes in Math. 880, Springer, 1981, pp. 211–248.
- [Ic] A. Ichino, *On the regularized Siegel-Weil formula*, preprint, 2000.
- [Ik1] T. Ikeda, *On the theory of Jacobi forms and Fourier-Jacobi coefficients of Eisenstein series*, J. Math. Kyoto Univ. **34** (1994), 615–636.
- [Ik2] T. Ikeda, *On the residue of the Eisenstein series and the Siegel-Weil formula*, Compositio Math. **103** (1996), 183–218.
- [KR1] S. S. Kudla and S. Rallis, *Ramified degenerate principal series representations for  $\text{Sp}(n)$* , Israel J. Math. **78** (1992), 209–256.
- [KR2] S. S. Kudla and S. Rallis, *A regularized Siegel-Weil formula: the first term identity*, Ann. of Math. **140** (1994), 1–80.
- [R] S. Rallis, *On the Howe duality conjecture*, Compositio Math. **51** (1984), 333–399.
- [S] W. J. Sweet, Jr., *Functional equations of  $p$ -adic zeta integrals and representations of the metaplectic group*, preprint, 1995.
- [W] A. Weil, *Sur la formule de Siegel dans la théorie des groupes classiques*, Acta Math. **113** (1965), 1–87.